

Lovejoyの2ndと3rdをリリースさせてもらって、ある音楽がどんなふうにかから愛されるのかを目の当たりにしました。

結成して数十年にも関わらず、ライヴは年に3〜4回、しかも3作しかCDを出していない、そんなバンドの音楽が多くの人に愛され続けている「音楽の幸せ」を一緒に体験させてもらったのは本当に嬉しいことでした。

人の足元に寄り添うようでいつの間にか自分の知らない心の奥まで届くbikkeの歌詞と唄、そしてこれ以上ないくらいポップな近藤さんのアレンジ、そしてシンプルで曲とともに歩き続けるような演奏。

そんな最初の、きらめくような「音楽の幸せ」がこのCDにはいっぱい詰まっています。

石橋正二郎 (F.M.N. Sound Factory)

愛するひと。夕餉の匂い。

いつもよりも柔らかな唄声は、

大切な仲間が傍らに居た証拠だろう。

こちら側で手を振るひとは、

大好きな唄たちにより、

私の思い出と重ねられ、

懐かしい場面を甦らせてくれる。

安堵して泣く。

ギターもピアノも私の体温に近い。

「体温に近い」

それはbikke氏と逢う度に思う。

92年の彼女を想像しながらなぞる今日。

この音源が世に出るのは私にも有り難い事だ。

名曲『野の人の野のうた』を

唄わせて戴く度に誇りに思う。

私の愛するひと。

伊藤せい子(夕凧)

bikkeさんに会ったのは2004年頃かな。

急に逝ってしまった友達の穴を、囲むようにして繋がった人達の一人として会いました。とにかく涙なしでは聞けないと、山本精一さんに勧められた『妙』。初めてライブで聞いた歌い声。その頃からずっと、晩御飯や夕暮れ、そんな日常を歌う向こう側に、荒涼とした地平の慟哭もかすかに聞こえてくるのです。

「1992年」のbikkeさんの歌声と近藤さんのピアノには瑞瑞しさにそんな奥深さがはっきり立ち現れています。

そして、先日聞きに行ったライブ演奏では、bikkeさんを中心に、そこには大きなあたたかい愛の海が溢れていて、今も昔もあちら側も包まれていました。

いぬんこ

1992年。何をしていたらふ。ああ1992年。私はソロの2枚目を出した頃だ。

そうか1992年。人には話したくないほど(話すけど)大事な時間を過ごした30代の第二の青春、その始まりの年ではないか。

bikkeおそるべし。よし針を落としてみよう(CDだけど)。

いつのまにか引き込まれていく。まっすぐな声、ネアカを感じる歌詞たち、愛にあふれる演奏(見ず知らずの主観だが間違っていないはず)。

そしてさすがだいちゃん、音がいいねえ。あ演奏はもちろんです。ジャケットも写真も、紙の手触りも字の大きさも、すごくいいなあ。いいのができましたね!私が目指すものひとつがこの中にあるような気がする。

bikkeおそるべしw。

1992年。リリース、おめでとうございます!

小川美潮

あ〜〜、やっぱり

どうしようもなく大好きな音楽…。

bikkeの声と言葉、メロディ。

近藤さんの織りなすサウンド。

まったくもってLovejoyはもうすではじまってたんやな?

すごく愛おいしい気持ちがあふれた。

それともうひとつ、

bikkeのギターが素晴らしい!

Lovejoyのアルバムよりも中心的にフィーチャーされていてギタリストとしての魅力も存分に感じる事が出来て嬉しい!なんて瑞々しさにあふれた作品だろう。

Lovejoyの活動停止の報に気を落としていたけれど

吹っ飛んでしまった。

過去の未発表作品のリリース…。

いや、俺には新しいスタートのファンファーレに聴こえた!

河村博司

ななななんて

みずみずしい

ななななんて

懐かしい

ななな涙が

滲んでしまったではないか。

ひっさびさの

胸きゅん

ときめきの音楽!

白崎映美

ピュアという言葉はこの人の歌の為にあると思う。自分が汚れていてごめんなさいと思わず謝りたくなる。強い想いを持つ儂い歌声。何回聴いても初めて聴いたようにハッとする。人が歌う理由が全てここにある。

白波多カミン

1992年のbikkeへ

目を閉じて東海道新幹線に飛び乗る。1992年、山に守られた古い町へ、bikkeたちに会いに。二度と戻れないはずの場所から、歌がさらさらと聴こえてくる。

かなえられた夢も、きえていった夢も、もう会えない懐かしい面影も、こんなはじまりの時からすっかり歌の中にある。どうして知っていたんだろう?

夕暮れ近くbikkeはギターを抱えて影法師になっている。友人たちの影も見える。その声はあたたかくて何も飾らない。その音楽はみずみずしく、言葉は胸の窓辺までそっと届けられる。

杉林恭雄 (Qujila)

人に話すまでもない、頭の中のこんがらがった独り言をそっと見せてくれるから、その度に胸を鷲掴みにされる。声も、曲も、大好きです。

あさドクロ (ドクロズ)

愛すべき先輩であり京都のお宝であり京都の妖精さん、bikkeさんと近藤達郎さんの「1992年」発売おめでとございます!!!

懐かしくて優しくてほっこりして、時々覗く狂気にハッとして、そして最後には涙がホロっとしてしまうそんなアルバムです!最高! 最高!!

そして、これが25年前?!と思う今も変わらぬbikkeさんの唄声に驚愕です!

おやびん (ドクロズ)

いつ頃だったかも思い出せないけれど、こんなふうにとっても寂しくて、虚ろで、哀しくて、

静かに暖かく、ほのかに明るく、希望に満たされた一日があった。

きっと生きているかぎり思い出せないけれど、いつだったかに、確かに在ったと信じる、

そんな一日のような音楽だとおもいます。bikkeさん、そんな一日の中でまた逢えるといいね。

西脇一弘 (sakana)

監督の名もタイトルも失念したが、あれは何の映画の中の風景だったか?

夕暮れ時の夕暮れ色の何とも云えない色調。

主人公が佇んでいるのは見渡すかぎりのコバンソウだかエノコログサだかの草原。

全体に漂うさみしげで心細いような、そして少々の焦燥感(甘美な)と、しかしどこか安らかで懐かしいイメージの美しいそのシーン……あ、思い出した、映画じゃなくてbikkeのあの歌じゃん。

ということが、以前実際にありました。

歌を聞いて映像が浮かぶというのはよくある話だが、この場合は何なのか?

いずれにせよ、名曲は想起されるビジュアルもまた名画ということです。

原マスマ